

加藤製作所

岐阜県中津川市



シニアの雇用促進に欠かせないのが受け皿づくり。名古屋からJRの特急で1時間弱の岐阜県中津川市には、早くから高齢者雇用に取り組みで成功した町工場がある。

師走のある日、同市内の金属加工会社「加藤製作所」では、パート雇用の竹村美智子さん(70)と降旗あい子さん(71)が自動車部品のチェックを続けていた。70歳を過ぎた今も2人は週に3、4日勤務。「ここに来てみると、年を忘れるの」と元気に笑う。

自動車や家電、航空機などの部品を板金加工する同社が本格的に高齢者を雇い始めたのは2001年。週末だけシルバー世代に働いてもらって工場の稼働目を増やそうと考え、こんな求人チラシを市内に配布した。

「土曜・日曜は、わしらのウイークデイ。意欲のある人求めます。男女問わず。ただし年齢制限あり。60歳以上の

半数が「シルバー部隊」



方
木曽路の西の玄関口に位置する中津川市は人口約8万人。製造業が盛んだが、地方都市の例にもれず、急速に高齢化が進んでいた。求人への反響は大きく、1000人を超す応募があった。初年度は15人を雇い、年間350日の工場稼働を表現した。

「若い人とワークシェアす
継続。現在は1000人の従業員
員のうちと半数の50人が60歳以上のパート勤務だ。
「シルバー部隊」の最高齢は77歳で平均年齢は66歳。半年ごとの契約で、年金が減らない範囲の時間だけ勤務する。社員から持ち上がりでのOBもいるが、6割以上は他業種からの再就職。以前の仕事は証券マン、主婦、大工さんや魚屋さんなどさまざまだ。
森雅弘さん(69)は元鉄道マン。週に4日働き、休日は趣味の百名山登山に歩く。「仕事の後で同僚と行くカラオケも楽しくて」と笑顔。
高齢者に配慮して工場内の照明を明るくしたり、正社員が指導技術を磨くなど、波及効果もあるよう。リマン・ショックの直後はパート勤務を減らすことで社員のリストラを避けた。同社の試みは、超高齢化社会に対応するひとつのモデルとして注目されている。

加藤製作所の工場
で元気に部品の取
り外し作業をする
69歳の森雅弘さん
(左)

生涯現役へ